学修の過程にアクティブ・ラーニングを組み合わせた授業の実践

―教職に関する科目の学修で「学士力」の育成を目指す―

Using "Active Learning" within the Learning Process in Classroom Instruction ―Aiming for the Development of "Undergraduate Potential" while Studying Courses in Pedagogy―

鈴木 強太 | Kyota SUZUKI

This report implies a drastic change of my teaching concepts and practices to prepare some student-centered activities, so called "active learning," into the three-phased lessons: pre-lesson, on-going lesson and post-lesson.

Nearly ten years ago, I was motivated by two educational incidents. One was DEZASEN, the Senior High School Design Championship in Japan, originally inaugurated by the Tohoku University of Art and Design; the other was the final report released by the Central Council of Education (CCE) of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. This led me to reform some of my conventional teaching concepts. In the design contest, which is a major nationwide event, some of the high school students gave brand new presentations based on so-called PBL, problem based learning. The CCE was determined on adopting the student-centered method: using "Active Learning" within the Learning Process in classroom instruction as an urgent policy. So I actively introduced newly designed lessons based on the PBL-oriented approaches and adopted "active learning", such as debate, discussion, presentation, groupwork and so on within the learning process.

According to data accumulated through questionnaires in which students evaluated my lessons, in general, the new teaching concepts and methods were accepted by the large majority of students as a meaningful way to learn.

Keywords:
学修の過程、アクティブ・ラーニング、学士力、PBL、
課題解決力、図解、Active Learning

1. はじめに

本学には、全国に例の無い教育資源がある。その一つが全国高等学校デザイン選手権である。筆者が初めて大学の教員として教職に関する科目(以下、教職科目)を担当したのはほぼ10年前であるが、当時は教師主導の講義式の授業を行っていた。その頃に、全国高等学校デザイン選手権に出会い、決勝大会では、高校生が社会の問題を取り上げ、独創的な解決策を明確に提案していたことに驚かされた。その後、本学のオープンキャンパスで手にした冊子で、「デザインのプロセス」に出会い、早速授業改善に取り組んだ[1]。

本稿は、このPBL方式(課題解決型の学びのプロセス)を様々なアクティブ・ラーニングに織り交ぜながら、教職科目の授業に応用した授業改善の実践報告である[2]。

2. 背景と経緯

教職科目の学修を通して、学生にとって有益な教職教養とは何か、芸術とデザインを志向する学生だからこそ身に付けられる資質・能力とは何か、これからの社会を生き抜くためにどんな力を付けてあげればいいか、このような命題を抱えながら授業改善を進めようとしていた頃、平成17年1月に中教審「将来像答申」が発表された。そこでは、「答えのない問題を発見してその原因について考え、最善解を導くために必要な知識及び汎用的能力を持つ学生を鍛える」ことを提言していた。それを受けて平成20年度の中教

審「学士課程答申」では「学士力」が強調され、その要素として知識・理解、汎用的能力、態度・志向性、総合的な学修経験と創造的思考力が示された。その後、平成24年度の答申では、主体的な学修時間の増加と維持に向けた学修の過程の3つの段階（授業のための事前の準備、授業の受講、事後の展開）と、大学教育の質的転換に向けた教育方法としてのアクティブ・ラーニング（課題解決型の能動的学修）を提示し、「大学改革は待ったなし」として大学教員の意識改革を迫ったのである。

本稿では、先ず、授業改善の視座として、授業改善のねらいを明らかにし、さらに学修の過程の中で、事前の準備と授業の受講（以下、授業）と事後の展開をどのように連結させたのかについて述べてみたい。

続いて、学修の過程の3つの段階にどのようなアクティブ・ラーニングを組み合せたのかについて、学生の活動を織り込みながら提示してみたい。

最後に、学修の過程にアクティブ・ラーニングを導入したことはどうだったのか、そのことが果たして学士力の育成に繋がったのかということについて、学生の変容を見ながら、後述の学生による「授業評価アンケート」の結果をもとに検証してみたい。

3. 授業改善の視座

(1) 授業改善のねらいと留意点

授業改善の視座の一つとして、学生の主体的な学びを引き出すために、筆者が担当する4つの教職科目に共通する授業改善のねらいと留意点を次のように設定した。

1) 課題解決力の修得

すべての科目に、課題研究レポートと課題研究ワークシートを採用し、学生が自ら課題解決に取り組む態度を育成し、課題解決力を身に付けさせる。

2) 「可視化」による思考力・構想力・発表力の向上

まとまりのある文章や自分の考え等を可視化する図解コミュニケーション（以下、図解）を積極的に取り入れ、美大生の潜在能力であるイメージする力や描写する力を伸ばし、思考力、構想力及び表現力等の向上を図る[3]。

3) コミュニケーション能力と協働性の伸長

グループ・ワークをすべての科目に導入し、要点を押さえながら聴き、話しかけ、共感し、仲間と一緒に創造することのすばらしさを感得させる。さらに、論理的に文章を書いたり、人前で質問したり話したりする場面を多く設定し、自分の考えをまとめて堂々と提案できる力を修得させる。

4) 「振り返り」による知識の定着と学修意欲の強化

PDCAサイクルを意識し、すべての科目で授業の振り返りを徹底して授業内容の定着や学修意欲の強化を図り、また学生の意見や感想等を教材化するなどして指導と評価の一体化を図る。

5) 学生とのラポールの形成

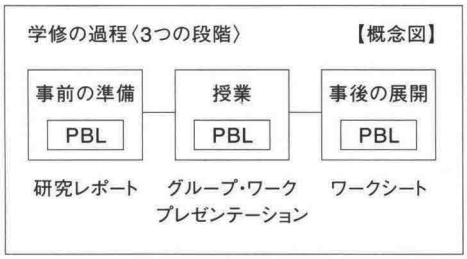
学生の主体的な学びを引き出すために、学生の提出物は教師とのコミュニケーションツールと捉えて丁寧にコメントを入れ、発問や面談の場面を増やしながら、教師と学生相互の信頼関係を構築することに留意する。

6) 資料のポートフォリオ化

授業で扱うすべての資料を冊子化し、自作のレポート等を学修歴としてポートフォリオ化して学修の深化と自作資料の利活用を図ることに留意する。

(2) 学修の過程を繋ぐ「学びの軸」の設定

授業改善の視座の二つ目は、学修の過程［図表1］の3つの段階を貫く「学びの軸」として、PBL方式を導入したこ



［図表1］ PBL方式で繋がった学修の過程

とである。これを中心軸にして様々なアクティブ・ラーニングを組み合せるという考えである。

先ず、学生は事前の準備として、PBL方式の課題研究レポートを作成し、次週の授業のグループ・ワークに持参する。その後、授業では担当グループがプレゼンテーションを行い、本時の学修活動に参加する。

授業を終えてからは、PBL方式の課題研究ワークシートの作成に取り組む。これが事後の展開である。以上が、3つの段階におけるそれぞれの連結の状況であり、すべての活動にPBL方式の視点が入っている。

4. 学修の過程の3つの段階でのアクティブ・ラーニング

学修の過程を3つの段階に分けて、それぞれの段階でどのようなアクティブ・ラーニングを組み合せたかを示し、併せて、それぞれの活動で学生がどのように変容しているかをまとめてみたい。

(1) 事前の準備と授業を繋ぐアクティブ・ラーニング

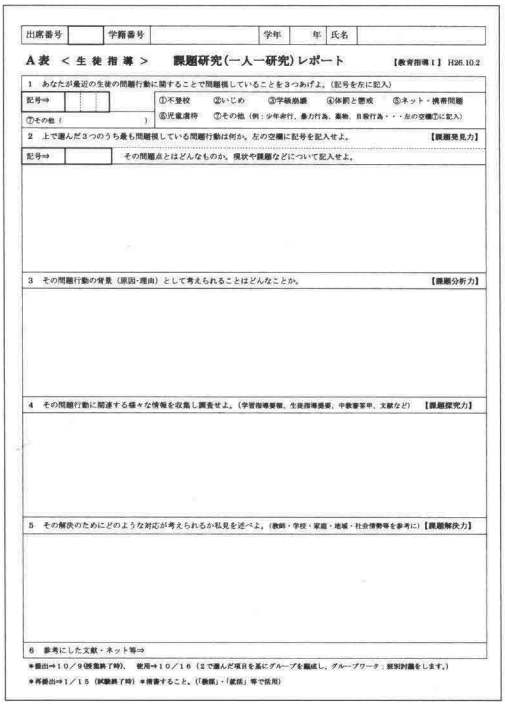
1)「課題研究レポート(一人一研究)」の作成 [図表2]

学生が自ら選択した様々な教育に関する問題の研究テーマについて、文献、ネット、メディア等を活用しながら課題解決の手順に沿って自ら調査・研究し、レポートにまとめる活動である[4]。

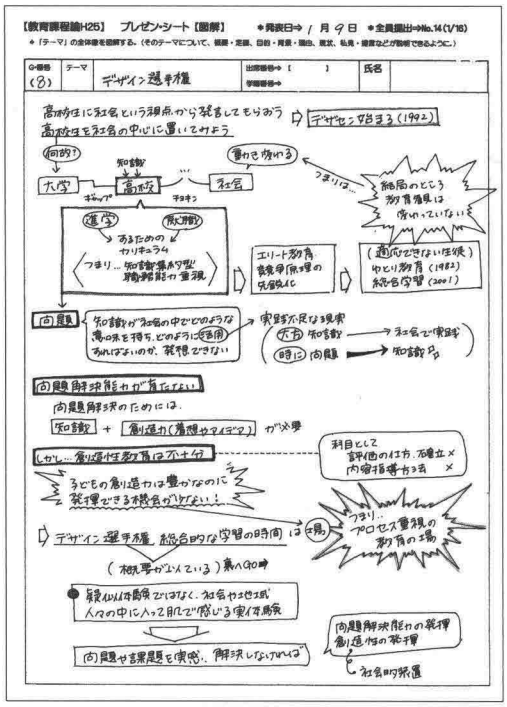
これは学生の主体的な学びの姿勢を引き出し、自然に課題解決の仕方を身に付け、併せて教職教養も深められるように考案したものである。学生は、「自分が選択したテーマを調べていく時、それぞれ要点理解→現状把握→調査分析→探究発表→検証・評価の手順を追うことで、論理的に考える手順を身に付けることができた。」などと述べており、PBL方式を習得し討論や発表の場で積極的に活用している。

2)「プレゼンテーション・シート」の作成 [図表3]

プレゼンテーションに向けて課題研究の内容を図解する活動である。学生は、「自分の主張を文章、図の両方からつくることで、おかしいところ、矛盾しているところに気付ける。自分の考えを分かりやすく可視化して伝える練習になった。」、「文章を図解することは特技の絵画に活かせるよう



[図表2] PBL方式の課題研究レポート



[図表3] 学生が作成したプレゼンテーション・シート

になった。」などと、可視化することを自分のスキルにしている。学生はこのシートを教材提示装置で投影しながらPBL方式に沿って説明する。この機材は、説明者と視聴者を一体化させる優れた授業のパートナーとなっている。

3) ウェビング(マインドマップ)の作成 [図表4]

テーマに対して自分の考えをキーワードにして拡げ、可視化する活動である。この活動は思考力や発想力を高めることなどから、筆者の授業では様々な場面で使用している[5]。学生は、「思考の整理がとてもやりやすい。」、「思考を可視化するのが早くなった。」、「様々な面で活用できるため、とてもタメになった。」などと活用場面を拡げている。

4) 映像の視聴

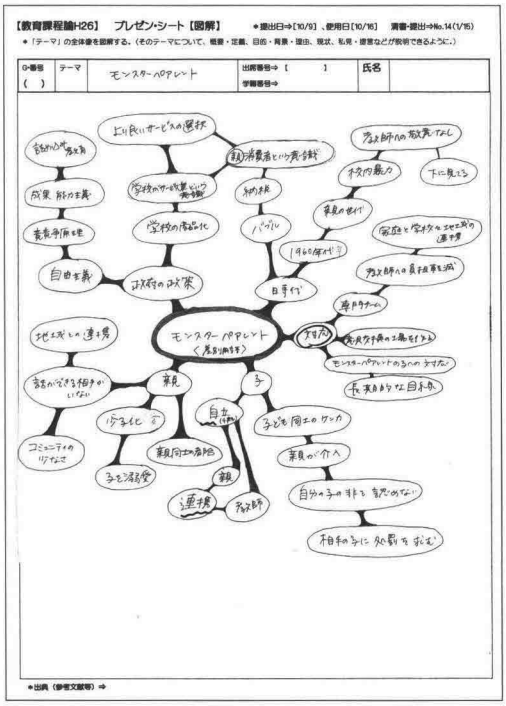
ICTを使って授業のテーマに関連する映像教材を事前に視聴させる活動である。学生は手軽なスマートフォンで視聴してPBL方式の「視聴シート」を作成し、授業に持参する。それは授業の導入教材として使うものである。

5) グループ・ワーク

学生が自ら作成した研究レポートを持ち寄り、「チームで特定の課題に取り組む経験をする」活動である。学生は、学年も専門も違うメンバーの中で、「グループ・ワークで意見交換を行って、コミュニケーション力の向上が一番の収穫であった。」と述べている。また、「教育について相手に伝えるということは初めてで不安があったが、自分の意見を聞いてくれる仲間がいて、そこから展開していくのがとても楽しかったし自分の視野が広がった。」と好感を持って振り返っているように、学生は集団の中で切磋琢磨し逞しくなっている。

6) NIE

NIE(Newspaper In Education)の活動として教育や社会の問題に関心を向けさせ、本時の学修への動機づけを図るため新聞記事をグループ・トーキングの材料にしている。学生は、「教育に対する新しいニュースを知ることによって、社会と教育の繋がりを意識できる。」と述べている。



[図表4] テーマを可視化したウェビングシート

授業の指導過程〈例〉
(下線部はアクティブ・ラーニング)

【導入】
1) アイスブレーク
教師:「今日のニュース」の提示
2) 本時の指導略案の提示
教師:授業目標と学修の目安の説明
3) グループ・トーキング
学生:「今日のニュース」等で意見交換
学生:個人のコメントの発表
4) プレゼンテーション
学生:教材提示装置で課題研究の発表
学生:発表の概要をメモ
(又はディベートやグループ・ワーク等)

【展開】
1) プレゼンテーションの要点整理と質疑
教師:提示装置で概要説明。問題点を焦点化
学生:メモの加筆・修正
2) 教師と学生の双方向のディスカッション
教師:発表内容から討論のテーマを設定
3) プレゼンテーションに対する評価
教師:コメント、学生:コメント
(最終回ではシンポジューム等)

【整理】
1) 本時の学修内容のまとめ
教師:プレゼンテーションを踏まえ授業資料で整理
2) アサインメントの指示
学生:ワークシートとレヴューシートの作成
3) 本時の授業評価と次時の予告

[図表5] 指導過程の中のアクティブ・ラーニング

(2) 授業の中でのアクティブ・ラーニング

1) グループ・トーキング

［図表5］の指導過程〈例〉に示されているように、小集団（2人～4人程度）で意見交換する短時間の活動である。教材提示装置で投影された新聞記事や、プレゼンテーションの資料や振り返りシートの学生の意見などに対して学生同士で考えを述べ合い、全員で論点を共有しながら考えを深め、本時の授業のテーマへと入っていく。この流れは授業のテーマに対する動機づけとして位置付けている。

2) ディスカッション

グループ・ワークでは、中心的活動となる意見交換の活動である。6人構成を基本としており、自作の討論資料となるものを必ず準備させ参加させている。

教師と学生による双方向のディスカッションでは、教師がファシリテーターとなって論点を絞り込み、図解などをしながら討論している。学生は、「自分が思い付かなかった意見が出て、自分の考えを広げてくれた。」と、他者から多くのことを学んでいる。

3) プレゼンテーション

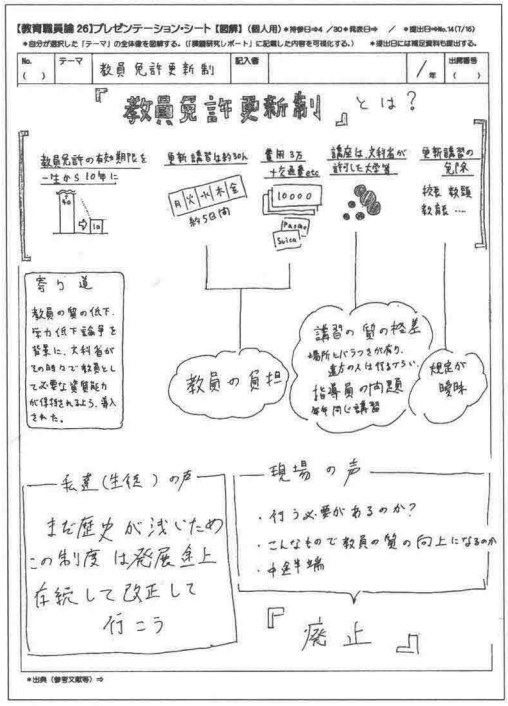
グループあるいは個人で作成した資料をもとに大勢の前で発表する活動である。発表は、「図解によるプレゼンテーション・シート」［図表6］を使用させ、「人にわかりやすく話す力」の育成を図っている。学生は、「自分達のプレゼンテーションを通して、さらに理解が深まったり、新たな疑問が生まれたりもした。」、「図解の仕方で発表の印象が変わると気付いた。」と述べており、図解することはお互いの内容理解を助け、要点を捉えた口頭での発表が自信を深め学習意欲を高めている。

4) ロール・プレイング

生徒指導等の場面で行う生徒役・保護者役、教師役などの役割演技で、場面指導ではカウンセリング手法を用いながら生徒との関わり方等を体験させている。演技の中から課題を見つけ、それを共通テーマにしてディスカッションに発展させ、授業の活性化を図っている。

5) ディベート

一つのテーマに対して肯定側・否定側の両面から検証する活動である。ものごとを多面的に捉えることの重要性を理解させている。学生は、「自分と反対意見のグループに振



［図表6］絵入りのプレゼンテーション・シート

［図表7］テーマの要点をまとめたワークシート

り分けられたことで、違った視点から討論での対策を考えることができ、良い経験になった。」と述べている。但し、より良い活動にするには十分な準備の時間が必要である。

(3) 事後の展開の中でのアクティブ・ラーニング

1) ワークシートの作成 [図表7]

担当グループが発表したプレゼンテーションを聴きながらメモを取り、そのテーマについて、授業で学んだ情報と自ら調べた情報を加えて報告書を完成する探究活動である。ワークシートの構成は、概ね課題研究レポートに合わせPBL方式にしてある。

学生にとっては、かなりハードな学修活動であるが、「自分で調べ直すことで、そのテーマへの理解が深まった。」などの感想に見られるように、「能動的な学修の習慣」も「質的転換を目的とした学修時間の増加・確保」も保証できる活動になっていると言える。

2) レヴューシートの作成 [図表8]

本時の授業を振り返る学修活動である。レヴューシートの表面には、本時での学び・気づきなどを文章で記入し、裏面には本時のテーマについて私見を述べる。

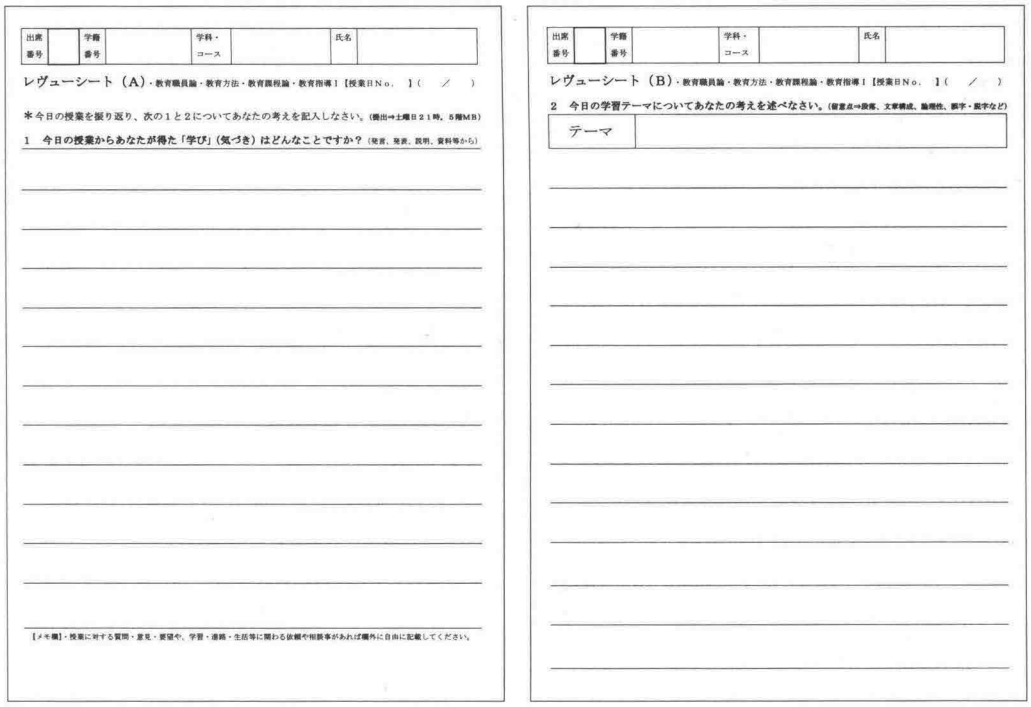
学生は、「毎回その授業の振り返りを文章にすることで、自分なりの考えをまとめることができた。また、これによって文章構成力をつけることができた。最初のほうと最後のほうでは、書き方がまるで違った。」と述べており、学生にとっては「考える力」や「書く力」を鍛える活動となっている。筆者はレヴューシートにも必ずコメントを入れ、学生とのコミュニケーションツールにしている。

3) シンポジューム

授業の最終回にシンポジュームを設定して、すべての授業を振り返りながら意見交換をして授業のテーマについて理解を深めている。但し、座長やシンポジストへの事前指導が不可欠であるが、時間の確保が難しい。

4) 小論文の作成

1年目から習得する図解法に、英語のパラグラフ・ライティングの手法を加味して、文章構成法をもとに文章を組み立て論理的に表現する活動である[6]。学生は学年進行とともに「書く力」が必要になるので、入門期の1年次と就職活動を迎える3年次で取り入れている。



出席番号		学籍番号		学科・コース		氏名	

レヴューシート (A)・教育職員論・教育方法・教育課程論・教育指導Ⅰ【授業日No. 】(/)

＊今日の授業を振り返り、次の1と2についてあなたの考えを記入しなさい。(提出⇒土曜日21時、5階MB)

1 今日の授業からあなたが得た「学び」(気づき) はどんなことですか？(発言、発表、説明、資料等から)

【メモ欄】・授業に対する質問・意見・要望や、学習・進路・生活等に関わる依頼や相談事があれば欄外に自由に記載してください。

出席番号		学籍番号		学科・コース		氏名	

レヴューシート (B)・教育職員論・教育方法・教育課程論・教育指導Ⅰ【授業日No. 】(/)

2 今日の学習テーマについてあなたの考えを述べなさい。(留意点⇒段落、文章構成、論理性、誤字・脱字など)

テーマ	

[図表8] 授業の振り返りのためのレヴューシート

5）学修ポートフォリオの作成

授業で配布する様々な資料や自作のレポート等の情報を一元化する活動である[7]。授業で用いた配布資料や自作のレポート等を自分の学習歴として可視化し、ポートフォリオ化あるいは冊子化をさせている。学生の反応は、「プリントをまとめるのは面倒くさくて敬遠していたが、自分のやってきたことの証明だと思えば苦労してやったかいを感じる。」、「今後の就職活動や作家活動でも活用できるものなので真剣に取り組んだ。」のとおりであり、活動の目的をしっかり受け止め意欲的に取り組んでいる。

5. 成果と課題

学修の過程にアクティブ・ラーニングを組み合せた授業について、[図表9]及び[図表10～14]の学生による「授業評価アンケート」の結果をもとに検証し、成果と課題を明らかにしてみたい。

授業評価アンケートから見た授業改善に対する評価

（1）評価項目（キーワード）

項目	キーワード	「授業評価アンケート」の中の評価規準
A	授業目標等の提示	この授業のシラバス（授業概要）において授業のねらいや目標は明確であったか。
B	質問や意見の機会	学生の質問や意見を聞く配慮が十分なされていた。
C	的確な授業の進度	学生の反応・理解度に応じて授業が進められた。
D	分かる授業の展開	教員は、高度な内容でも分かりやすく説明しようと努力した。
E	知識や考え方の修得	新しい知識や考え方を修得する場としてこの授業は適当であった。
F	有意義な授業内容	この授業は有意義であった。
G	授業に対する学習意欲	自分はこの授業に意欲的に取り組んだ。
H	授業内容の理解度	自分は授業内容を十分理解できた。

［図表９］（註：表中の「キーワード」は筆者が作成）

（2）授業に対する評価の推移（５段階評価）とアクティブ・ラーニング等の導入時期

教職科目	項目	第一期 (H19)	第二期 (H25)	主なアクティブ・ラーニングの導入時期		
				第一期	第二期・前期（H19～22）	後期（H23～24）
教職員論 (H17～)	F	4.1	4.8	小論文 図解法 ディベート トーキング	課題研究レポート、グループワーク、プレゼンテーション、ウェビング、ポートフォリオ	レヴューシート ワークシート 双方向の討議
	E	4.3	4.7			
	D	4.3	4.6			
	A	4.1	4.6			
	G	3.9	4.5			
	H	3.4	4.4			
教育指導Ⅰ (H17～)	E	3.9	4.5	小論文 図解法 トーキング ディベート	場面指導、 課題研究レポート、グループワーク、プレゼンテーション、ウェビング、ポートフォリオ	レヴューシート ワークシート 双方向の討議 エントリーシート
	F	3.8	4.4			
	H	3.6	4.2			
	G	3.5	4.2			
教育方法 (H20～)	F	4.0	4.5		学習指導案、図解法、ＫＪ法、課題研究レポート、グループワーク、プレゼンテーション、ウェビング、ポートフォリオ、トーキング （キャリアプランニング＋面談）	レヴューシート ワークシート 双方向の討議 学級経営案
	E	4.1	4.5			
	G	3.9	4.4			
	H	4.1	4.2			
教育課程論 (H20～)	D	4.2	4.6		概念図づくり、図解法 課題研究レポート、グループワーク プレゼンテーション、ウェビング、ポートフォリオ、トーキング	レヴューシート ワークシート 双方向の討議
	B	4.4	4.4			
	E	4.3	4.4			
	G	4.0	4.3			

［図表１０］（註：教育方法と教育課程論は平成１９年度から実施している。「第一期」の評点は平成２０年度の評価による。

そこで、初めて授業を開始した平成17年度から18年度にかけての【第一期】と、授業改善に取り組み始めた平成19年度から平成24年度までを【第二期】として、それぞれの時期において筆者がどのような授業の改善に取り組んだのか、その取り組みを受講した学生がどう捉え、どのように変容したのかを検証してみたい。

（1）第一期（平成17年～18年）

・担当:教育職員論、教育指導I

・[図表10]の（H19）の欄を参照

〈検証〉

[図表11]～[図表14]の点線部分が第一期の授業に対する評価であるが、[図表10]のとおり、教育職員論も教育指導Iも「H:理解度」が3.4と 3.6で、さらに「G:学習意欲」も3.9と3.5と極めて低い。

その理由の一つは、筆者自身の主体性と指導観にあったと言える。当時の授業は、前任者のシラバスにそって、教師がほぼ一方的に講義をする形をとっており、また、学生は授業へ向けた事前の準備もなく授業に臨んでいるため、難解な教育用語が多い学習内容についての理解は十分ではなかったと思われる。

二つ目は、事後の展開も無いため、授業での気づきや学びが次週までに消えてしまい、学習意欲も続かなかった。3年生が多い教育指導Iでは、「F:有意義な授業」も3.8と低い。当時は教員採用試験問題等を動機づけとして導入してみたが、その効果も一時的で、教育課題に対する問題意識が高く学修経験を積んだ3年生にとっては、授業で知識を吸収するだけでは自分を高めることができず、不満が残るつまらない授業であったのだろう。

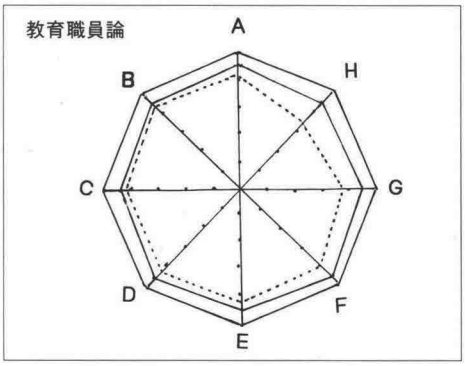
（2）第二期（平成19年～24年）

・担当:教育職員論・教育方法・教育指導I・教育課程論

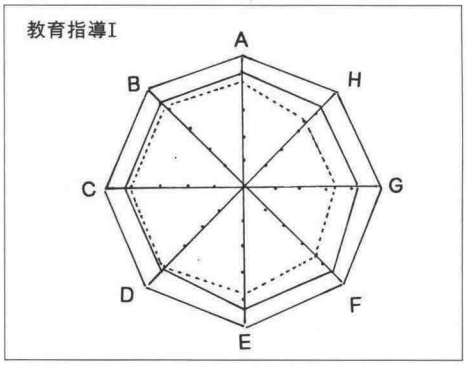
・[図表10]の（H25）の欄を参照

〈検証〉

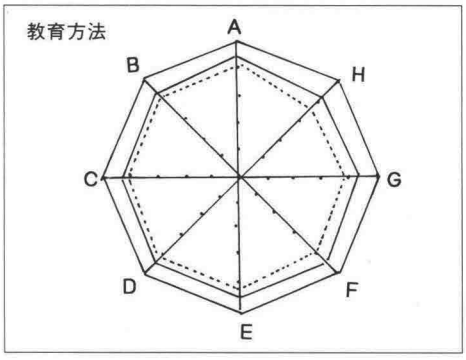
[図表11]～[図表14]の実線部分が第二期の授業に対する評価である。各項目とも4点台後半まで上昇しており、授業改善の取り組みが概ね奏功していると考えられ



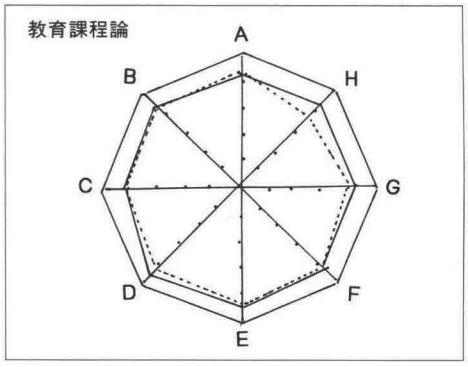
［図表11］教育職員論



［図表12］教育指導I



［図表13］教育方法



［図表14］教育課程論

る。そのことを考察するために、授業の最後に実施している「授業に関するレヴューシート」の中の学生の声などを参考にしながら、授業全般の取り組みを振り返ってみたい。

先ず、教育職員論では「F:有意義な授業」が4.8と最高点となり、その伸び方も+0.7と最大になっている。

この理由は、小論文指導で論理的な文章表現力を身に付けたこと、図解を用いて思考する方法や表現する方法の有用性を体感したこと、自分が作成した資料を製本し参考書として活用する方法が2年目以降の学生生活にも役立つことを確信したことなどである。

また、「H:授業内容の理解度」が+1.0と最大の伸びを示し、「E:知識や考え方の修得」も4.7、「D:分かる授業」も4.6と高くなっている。

大きな理由の一つは、入学間もない1年生が初めて目にする多くの教育課題に対して、自ら研究して課題研究レポートをまとめ、問題意識を高めた状態でグループ・ワークに参加していく。そして、様々な考え方に遭遇し意見を交換する中で学習内容を理解し、知識も学修意欲も高められたからである。先輩や他学科の学生との交流は強烈な動機づけになっている。

もう一つの理由は、「A:授業目標等の提示」が4.6と+0.5の伸びを示しているように、筆者自作の「指導案〈略案〉」［図表15］を授業の冒頭に画面で提示し、学習の目安を理解させた上で授業に入るようにしたことが大きい。毎回筆者の学習指導案〈略案〉を見ながら授業を受けていることから、基本的な指導案の作成の手順は身に付いているはずである。これらの一連の活動は4科目すべてで採用している。

教育指導Iでは、「G:学習意欲」が+0.7と授業スタート時期と比べ際立って高い評価になった。これは就職活動を控える3年生が、2年次に実施した「キャリア・プランニング」［図表16］の作成と個別面談を土台に、エントリーシートの作成に取り組みながら、自分の「強み」を整理したことが学習意欲を高めており、さらに、幾度もレヴューシートやワークシートの作成作業を続ける中で、思考力も文章での表現力も高まっていくのを実感したようである[8]。

この授業でも、他の授業と同様に教師のコメントに対する喜びと感謝の言葉が返ってくることが多くなった。また、場面指導の中で学んだ、生徒との関わり方などのカウンセリングの手法が自分自身の人間関係づくりにも役立つことが分かり、それが「G:知識の修得」と「F:有意義な授業」の

+0.6の高い伸びに表れている。

教育方法では、「F:有意義な授業」と「G:学習意欲」の2つの項目が+0.5と大きな伸びを示している。この時期では、ブレーンストーミングとKJ法の組み合わせた思考整理法、言語活動を取り入れた学習指導案の作成、ウェビング(マインドマップ)を使った発想法による学級づくりのシートの作成[図表17]、情報の整理や伝達に有効な図解法[図表18]などを習得させる演習を多く盛り込んでいる。学生は将来に役立つノウハウを体得できたことを喜んでおり、そのことが学習意欲を高める一因にもなっている。これらの教育方法は他の科目でも採用している。

教育課程論では、「D:分かる授業」が4.6と最も高い評価で、「B:質問や意見の機会」も最初から4.4と高い評価であった。これは、グループでのディスカッション、グループによるプレゼンテーションなど、チームで活動する場面や他者から学ぶ場面が増えたことなどが理由である。

また、「H:授業内容の理解度」は授業を始めた頃は評価が低かったが4点台まで伸びた。これは授業の振り返りの導入によるものである。学生は「レヴューシートを毎回提出し、次回の授業時に受け取り、教師のコメントを読んで自習の点検ができた。」と述べている。この活動は他の授業でも実施しているが、学生とのラポールの形成に繋がっていると言える。教師と学生相互の信頼関係が構築できているか否かは授業の成否を左右する要因であることを実証している。

一方、「C:授業の進度」は4.1で横ばいであった。それは、芸工大の教育の概念図づくりなどの作業的な演習に多くの時間をかけ過ぎ、授業が計画通り実施できなかったからである。演習では時間配分に留意すべきである。

【教科名】 教育職員論

指導案<略案>… No. 10　　平成26年6月18(水)

テーマ	教員の身分と職務―1
目標	①教員研修の意義、研修の義務・権利について考えを深める。

1 連絡指示	①「出席番号」を出席カードに記入
2 返却	①レヴューシート
3 配布物	①授業資料、②レヴューシート、③ワークシート1枚とメモ用紙1枚、④私の仕事術⇒次回

過 程	教師の活動	指示・留意点・評価等
導入 10:30 (15) 10:45	1 挨拶…アイスブレーキングの話題 2 ニュースと意見交換 ①新聞記事… ②4年生の教育実習⇒自信、教職の魅力、教師へ激励、感謝の花束、寄書き ③レヴューシート(返却)…①不登校と「学校」、②いじめと携帯問題 3 前時の復習…レヴューシートから ①教育職員免許⇒教職課程(大学)…求める資質・能力(＊学修カルテ) ②更新制⇒就職…時代のニーズに合った資質・能力 ③教員の「資質・能力」の「不易」(使命感など)と「流行」を捉える。 ＊プリント「富工大生が考えた資質能力」を参照しながら ＊いじめ、携帯、体罰…「流行」…対応の仕方⇒「研修」で指導徹底	＊ワークシートの作成について ①プレゼンを聞いて、メモし、自分でも調査・研究…4年次に活用できるから ②ワークシート提出清書⇒7／16 ＊レヴューシートから ＊「資質・能力」の「不易・流行(ニーズ)」
展開 10:45 (20) 11:00 (15)	1 プレゼンテーション…グループNO. 3「体罰」(2つのグループ) ＠5分×2＝10分＋予備10分＝20分 2 発問(感想、意見) とコメント(考察のポイントの焦点化) 3 ディスカッション…テーマ「体罰」(プレゼン)と教員の身分・職務 4 プリントで整理とまとめ…「研修」…「流行」の課題への対応 「不易」の「使命感」等の再認識	＊時間配分…ストップウォッチ ＊教師の体験談 (双方向で活発に)
整理 11:35 (5)	1 本時の学習のまとめ、「レヴューシート」の指示⇒書号を！ 「主張」のある明解な文章を！(意見・主張、理由・根拠、展望など) ＊自分の考えをしっかり、コンパクトにまとめる訓練！(～である調)	＊提出日⇒金曜日の昼まで。MBに投函 ＊場所⇒5階のメールボックス「鈴木」 (新御なうちに早く書いてしまおう！)

【指示・連絡・次時の予告】…No. 11 (6／25)

【次時の予告】①テーマは「教員の身分と職務－2」(身分、服務・義務・制約)… 発表⇒「国旗・国歌、教員不祥事」(2)
②「私の仕事術」⇒次回

【その他】 ①毎週金曜日の午後⇒オフィスアワー(教育相談活動…進路・生活・学習・人生) ＠519

[図表15] 筆者の指導案〈略案〉

6. 成果と課題

学修の過程の3段階をPBL方式の学修で連結し、学生一人一人が主体的に取り組むアクティブ・ラーニングを各段階に組み合わせたこの授業システムは、教師にとっては教育の質的転換を可能にする教育方法であり、学生にとっては、「次代を生き抜く力」を育む有効な手段であると確信することができた。

そのことを、学修の過程の設定とアクティブ・ラーニングの導入について、さらに詳しく総合的に整理してみたい。続いて、この方法が「学士力」の育成に繋がっているのかについて、「授業評価アンケート」に示された全体的な特徴をもとに総括してみたい。さらに、平成25年度後期に新たに導入された新科目「教職実践演習」での学修との関係についても触れてみたい。

(1) 学修の過程の設定について

先ず、前項で明らかになった学修の成果は、PBL方式を連結軸にしてアクティブ・ラーニングを組み合わせたこのシステムによるものであると思われる。授業評価アンケート[図表10～14]に示されているように、評価項目で見れば、「E:知識や考え方の修得」、「F:有意義な授業」、「G:授業に対する意欲」、「H:授業内容の理解度」などがすべての科目で高い評価を受けているのは、このPBL方式の学修方法が学生に受け入れられている証左であろう。

第二の成果としては学修の過程の3つの段階での学修の系統性と継続性が学生の意欲を高めたことである。筆者は先ず授業のための事前の準備の段階で、学生に課題研究レポート(一人一研究)を作成させ、このレポートをグループ・ワークに持参させた。グループ・ワークでは、学年や専攻に関係なく一人一人が堂々と意見交換ができている。それ

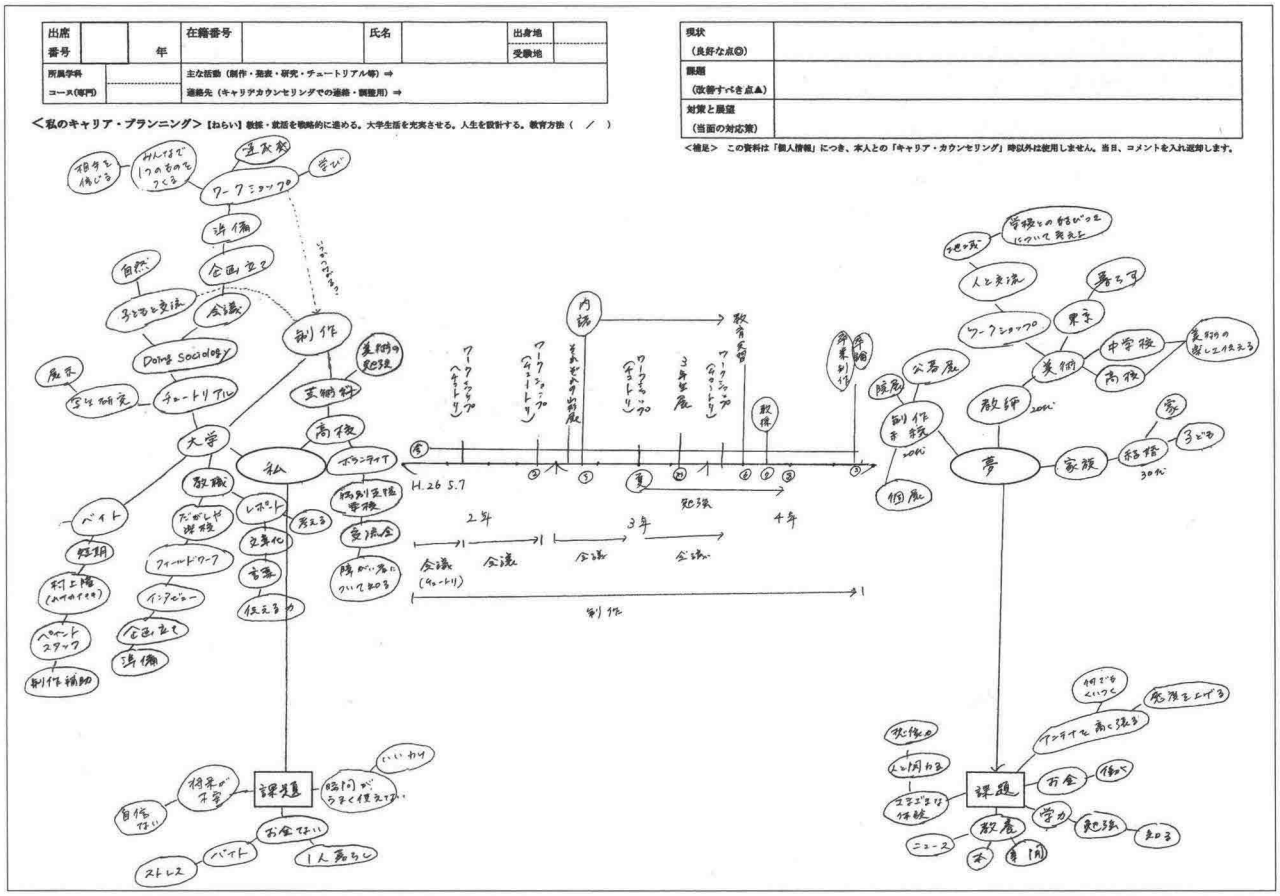
は各自が事前に苦労して作成した自分の資料を持っているからである。グループで学外の施設を訪問し現場で聴き取り調査をする班も出てきている。

続く授業の段階では、グループ・ワークでまとめた資料をもとに研究テーマに関するプレゼンテーションを意欲的に行っている。この発表に対するディスカッションや教師の授業資料等から、学生は様々な気づきや学びを獲得し少しずつ成長していくのが分かる。

さらに事後の展開の段階では、授業の振り返りを徹底させ、探究的な学修を促した。レヴューシートとワークシートをまとめさせ、教師からコメントを付けて返却している。そのことで学生は学修の手応えを感じ、自尊感情や自己肯定感を育み自己実現への欲求を高めている。

「レヴューシートやワークシート、小論文などの一つ一つにコメント[図表19]が書いてあると、次回はさらに良いことを書こうという意欲がわく。また、『自分のことを見ていてくれる、理解してくれる』と思い、頑張ろうと思った。生徒と直接話す時間は無くとも、先生がこのようなプリントへ書き込むことによって、生徒理解や意欲向上につなげることを学んだ。また、もし自分が教員になったら、このようなことをして生徒のやる気を引き出してみたい。」、「毎時間毎時間の授業内容の復習ができる点が良かった。これがあるために、この授業の理解度が格段に上がったと思われる。今まで私は授業が終わった後はそのままにしていた。このように振り返る機会が与えられていると、自分で調べてみたいと思ったことを調べることができた。」という学生の声に代表されるように、教師のコメントには学生の成就感を高め学習意欲を持続させる威力がある。「たかがコメント、されどコメント」である。これは事後の展開を支える決め手であると考え、すべての科目で実施している。わずか数行のコメントでも学生の「尊敬の欲求」を満たすことに繋がり、教育的効果は計り知れない。

課題としては、学生への負担過重になったことである。今後は、専門学科での学修の実態を踏まえながら、事後の展開における学修の量的なバランスについて留意すべきである。



［図表16］キャリア・プランニングのシート

(2) アクティブ・ラーニングの導入について

筆者が導入したアクティブ・ラーニングの中で、学生の変容が強く表れたのはグループ・ワーク、プレゼンテーション、図解によるコミュニケーション、教師と学生の双方向のディスカッション、授業の振り返りである。中でも効果があったのはグループ・ワークと授業の振り返りである。

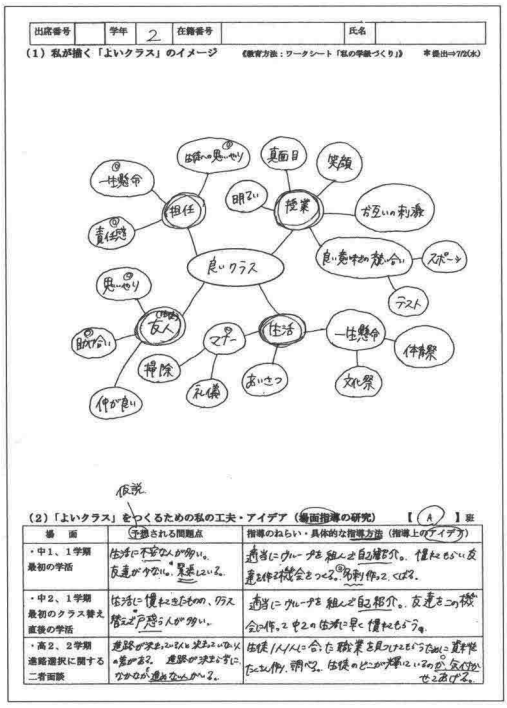
先ず、前者は「異なる背景を持つ学生同士が同じテーマに対して主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修」を助長するからである。これは、教師と学生の双方向のディスカッションと同様に、「お互いが意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場」を創りあげているとともに、「思考力、チームワークやリーダーシップ」を育んでいる。

後者は、授業の中で得た情報をもとに学生自ら外部情報を収集し、自分の考えをまとめていく作業を通して、情報リテラシーを修得している。学生の「授業に関するレヴューシート」によれば、多くの学生が自分の成長を実感している。

さらに付け加えれば、「図解によるコミュニケーション」であろう。プレゼンテーションでも課題研究レポートでも様々な場面で、自分で思考したことを図解で可視化させ、教師の側でもことあるごとに図解での説明を行っている。一つのテーマについて思考を繰り返し、一旦文章化したものを図で可視化しながら構想する一連の学びが、思考力や創造力を育んでいることは確かである。学生は、「情報や思考を図解することで、文章を連ねるよりずっと自分の中のそれらが整理できた。頭の中に事柄の位置関係が出来上がり、立体的なイメージで考えることで、全体を見渡すことができるし、また発想を色んな方向に広げやすい。自分の中で整理のつかない問題(例えば絵を描く際のテーマの追求等)を考える時もよく活用しているが、前より考えやすくなった。」とか、「他の授業でも分からないことや先生が言ったことを図解して整理するクセがついたのが大きな変化である。」と述べている。

このような学生の変容は、「E:知識や考え方の修得」や「D:分かる授業」の項目の評価の高さに表れており、この図解によるコミュニケーションが美大生ならではのスキルになっていることは喜ばしい限りである。このほかのアクティブ・ラーニングの活動も同様に、「思考力、創造力、構想力を育み、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修」と言えるのではないだろうか。

課題としては、教職教養に関する知識の習得と能動的な学修活動とのバランスが挙げられる。後者への時間のかけ過ぎが前者の活動不足となって「知識・理解」の分野が疎かになったりする。もう一つの課題は知識の量の問題があ



[図表17]「よいクラス」をイメージしたウェビング

[図表18] 自分のキャリアを俯瞰した図解シート

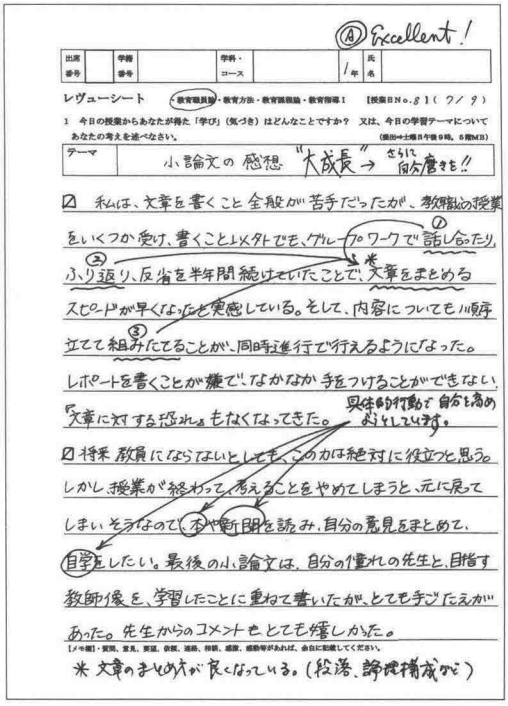
る。意見交換や討論、論文作成やレヴューシートの作成などの様々なコミュニケーションの場面では、基盤となる語彙力の差や社会への関心度等の温度差がグループの活動を左右する。従って、意図的に手書きで書かせる場面を増やし新聞の定期的な購読を強く推奨しているところである。

(3) 学士力の育成について

前項で示したように、学修の過程にアクティブ・ラーニングを組み合せた学修活動は学生に大きな変容をもたらした。そこで中教審で示された「学士力」の構成要素である知識・理解、汎用的能力、態度・志向性、及び総合的な学修経験と創造的思考力の4点から総括してみたい。

先ず、「知識・理解」については、教育に関する諸課題を4つの教職科目すべての授業で取り上げており、学生は現実社会と関連づけながら課題研究やグループ・ワーク等に取り組み、様々な学修を通して、「文化・社会・自然に関する知識」を教職教養として獲得している。そのことは、筆記試験の答案、小論文、レヴューシートやワークシート等の記述内容のレベルの高さとなって表れている。

次の「汎用的能力」については、グループ・ワークや双方向のディスカッション等で「コミュニケーション・スキル」を、グラフを資料として使ったプレゼンテーション等で「数量的スキル」を、文字情報を集約し、KJ法や図解法で可視化した演習の時間に「情報リテラシー」を、課題研究レポートやディベート等の活動などを通して「論理的思考力や問題解決力」を身に付けているものと考えている。


Ⓐ Excellent!

出席番号		学籍番号		学科・コース		1年	氏名	

レヴューシート　教育職員論・教育方法・教育課程論・教育指導Ⅰ　【授業日No.8】(7/9)

1　今日の授業からあなたが得た「学び」(気づき)はどんなことですか？　又は、今日の学習テーマについてあなたの考えを述べなさい。　(提出〆切日午後9時、5限目)

テーマ	小論文の感想 "大成長" → さらに自分磨きを!!

☑ 私は、文章を書くこと全般が苦手だったが、教職論の授業をいくつか受け、書くこと以外でも、グループワークで話し合ったり、ふり返り、反省を半年間続けていたことで、文章をまとめるスピードが早くなったと実感している。そして、内容についても順序立てて組みたてることが、同時進行で行えるようになった。レポートを書くことが嫌で、なかなか手をつけることができない、文章に対する恐れ。もなくなってきた。

具体的行動で自分を高めようとしています。

☑ 将来教員にならないとしても、この力は絶対に役立つと思う。しかし授業が終わって、考えることをやめてしまうと、元に戻ってしまい、そうなので、本や新聞を読み、自分の意見をまとめて、自学をしたい。最後の小論文は、自分の憧れの先生と、目指す教師像を、学習したことに重ねて書いたが、とても手ごたえがあった。先生からのコメントもとても嬉しかった。

[メモ欄]・質問、意見、要望、依頼、連絡、相談、感謝、感動等があれば、自由に記載してください。

＊文章のまとめ方が良くなっている。(段落、論理構成など)

[図表19] コメントの付いたレヴューシート

「態度・志向性」については、キャリア・プランニング等の活動を通して「自己管理力」を、グループ・ワークで「チームワークやリーダーシップ」を、道徳や教員の不祥事等を取り上げた課題研究の場面で「倫理観や市民としての社会的責任」を、時代とともに変化する教育課題の解決策を考える課題研究の学修で「生涯学習力」を身に付け、学生は自信を付けながらさらに教職教養を深めている。

また、「総合的な学修経験と創造的思考力」については、学生の学内外の諸活動を見れば明らかである。学内の様々なイベントに向けたグループ・ワーク、PBLの手法を活用した地域での研究調査活動や地域の活性化に向けた住民との交流活動等の場面で、「これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力」を発揮している。卒業後も地域おこしの活動等で学修経験や創造的思考力を活かして活躍している。

(4) 系統的・継続的な学修体系について

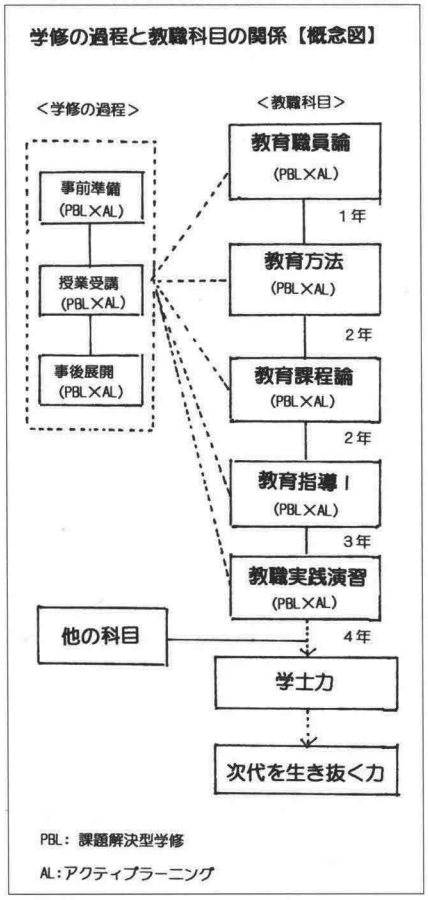
本稿では、ここまで学修の過程とアクティブ・ラーニングとの関係性について、4つの教職科目での実施状況を中心に分析をしてきたが、実は、もう一つの視点がある。

教職課程を選んだ大多数の学生は、PBL方式の授業を4年間にわたって受講しているという点である。1年次では理想とする教師像と教職の意義を追い求め、2年次では様々な演習を通して学習指導や学級経営等の基礎力を高め、3年次では子どもとの関わり方等について理解を深める。さらに4年次では、昨年度から導入された新科目「教職実践演習」で即戦力となる実践的な指導力を身に付けていく[9]。

[図表20]のように、学生は4年間にわたって教職科目を系統的に、しかも継続的に学修している。他の教職科目を

含め、前項に示したような様々な学修が4年間続き、その成果が「教職実践演習・授業実践記録・2013」の「成長の軌跡」に示されている[10]。「私にとって教職課程を受講することは、自分の想像より遥かに大変なことがたくさんあった。しかし、その大変さを味わい、頑張ることの大切さを学んだからこそ、挑戦することを億劫に感じなくなっていった。そして、苦手なこともやってみようかと思えるようになった。このようになったのも教職のおかげである。これから社会に出て困難なことにぶつかったとき、教職で学んだことが必ず生きてくるはずである。これからも学び続けることを忘れず、生涯を通して挑戦し、成長し続けられる人でありたい。」この言葉に代表されるように、学生は本学の教職課程での学修を糧に今後の生き方を力強く述べている[11]。

以上のことから、学修の過程にアクティブ・ラーニングを組み合せた学修活動を、4年間の一貫した教職科目の学修システムに取り入れるならば、それは「学生を知的に鍛える場で自らを進化・革新させる」活動になっていくであろうし、「学士力」を育む教育の営みになることは確かである。その学修こそ、「学生が自ら人生を切り拓くための最大の財産」となり、「将来予測が困難な次代を生き抜く基盤」になっていくのではないかと期待している。



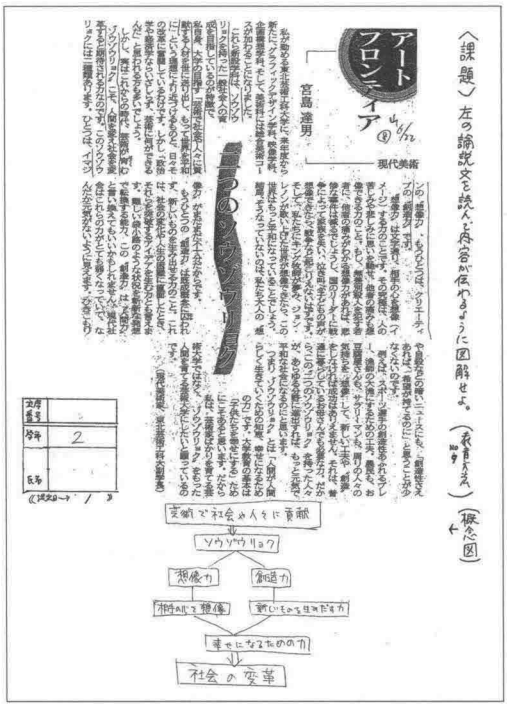
[図表20] 4年間の学修の系統性と連続性

7. おわりに

「学ぶことは真實を刻むこと、教えることは希望を語ること」の意味は何か。本学の正面に掲げてあるこのルイ・アラゴンの言葉の意味を、教育職員論の2コマ目に、受講して間もない1年次の学生に問いかけることにしているが、皆回答に苦慮するばかりである。

しかし、その後は様々な教育課題に関する学修を深めながら進級していく。やがて2年生になると、教育方法の授業では「二つのソウゾウリョク」[図表21]を図解しながら本学の教育指針を知り、教育課程論の授業では、大学設立宣言文などの教育情報を整理しながら「芸工大の教育」の全体像を概念図[図表22]に描く中で、教育課程の全体像を理解し、感激し、母校愛に目覚めていく。

3年生は、教育指導Ⅰの授業で、子どもの生活や進路に関する課題はすべて家庭の問題とリンクし、その背景にあ



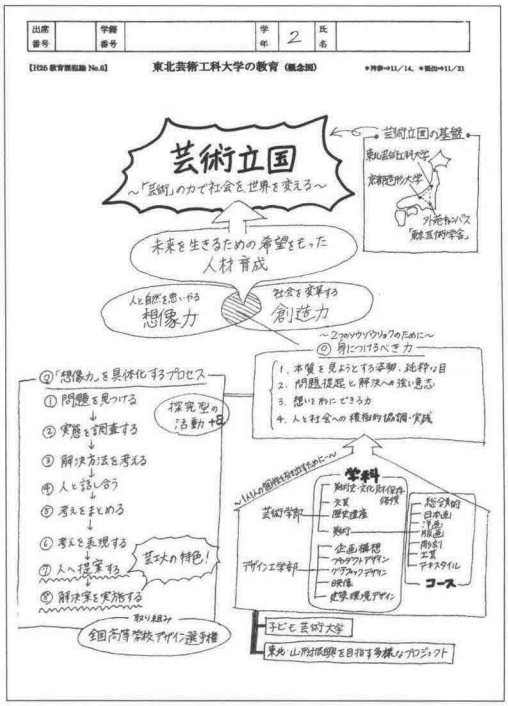
[図表21] 新聞記事の提言を可視化した図解

る社会の事情を映したものであることに気付くようになる。1年次から育んできた「教師の目線」で、本学の教育のモットーである「愛が足りない　だからこの大学がある」の意味を理解していく。

彼らは「教職を学んでいると社会が見える。」と言う。受講の後に見られる驚くばかりの成長の姿である。「教職の授業では生徒の立場ではなく教師の立場で考えなければならないので戸惑ってしまう。」と言っていた1年生がしっかりと「真実を刻む」ようになっていく。4年生が教職実践演習のグループ・ワークで見せる真剣な学修活動や教員採用試験で現役合格を果たすまでの学修態度などを見ると、いつの間にか「社会人基礎力」を身に付け逞しく育っていることに気付く。まさに教職の醍醐味である。

筆者は本学での教職課程教育の実践を通して、これからの学校教育は「何を教えるか」、「何を学んだか」という視点だけでなく、「何を修得させるか」、「何を修得したのか」という視点を教師も学生も持つべきであることを学んだ。

今、「自立・協働・創造を基軸とした生涯学習社会」が彼らの登場を待っている。この大きな舞台で、前述の「学士力」を「社会を生き抜く力」にして、「未来への飛躍を実現する人材」を目指しながら「絆づくりと活力あるコミュニティーの形成」を目指し活躍してほしいと願っている[12]。



［図表22］図解による母校の教育課程の全体像

註

1. 『僕らのソウゾウトラベル1460』(2010)：東北芸術工科大学「デザインのプロセス」は問題を考えるプロセスで、次のステップが示されている。
   ①問題を見つける、②実態を調査する、③解決方法を考える、④人と話し合う、⑤考えをまとめる、⑥考えを表現する、⑦人に提案する、⑧解決策を実施する
2. 「VIEW21」(2014)：ベネッセ教育総合研究所　P.29
   Problem Based LearningまたはProject Based Learning
3. 久垣啓一(2008)：「図解コミュニケーション」THE 21
4. 筆者が担当する4科目をすべて受講した場合、一人が調査・研究する課題研究のテーマの数は合計でおよそ50項目となる。なお、課題研究レポート(一人一研究)のフォーマットは、概ね次の学修ステップ(PBL方式)のいずれかで構成されている。
   ①テーマの概要、背景・理由、国や学校の対応、私見・提言
   ②テーマの趣旨、活動内容、指導法、探究的活動、成果と課題
   ③テーマの現状、背景・理由、目的・特徴、所見(賛否と理由)
   ④テーマの問題点、現状・背景、国や学校の対応、私見・提言
5. 西村宣幸(2008)：『ソーシャルスキルが身に付くレクチャー&ワークシート』学事出版　P.19
6. Matsuo Hashimoto(1979)：*A Guide to Reading and Writing Asahi press*
7. 鈴木敏恵(2002)：『ポートフォリオで進路革命』学事出版
8. 「キャリア・プランニング」は、ウェビング(マインドマップ)を使って「今の自分」を振り返り、「未来の自分」をイメージさせるキャリア・デザインの演習である。このシートで受講生全員に面談を実施し、大学生活の点検と学修相談や進路相談を行っている。
9. この授業は3人の教員によるティーム・ティーチングである。
10. 『教職実践演習・授業実践記録・2013』(2014)：東北芸術工科大学教職課程　P.24
11. 同P.51
12. 中教審答申(2013)：『第2期教育振興基本計画について』

［執筆者］
鈴木 強太
Kyota SUZUKI
教職課程
Course of Pedagogy
非常勤講師
Part-time Lecturer